
鴉と鞍馬

携帯談話

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴉と鞍馬

【Nコード】

N7666T

【作者名】

携帯談話

【あらすじ】

素晴らしい位に自己満足です。後、キャラ崩壊が激しすぎます。文がわかんなくなってます。どこの誰だよってなってます。そしてこれは作者が布団の中で思った事を書いた駄文です

（前書き）

自己満足です

作者が布団の中で思いついた事です

キャラ崩壊が激しいです。そして作者の初めての恋愛もどきです

ww

書いてる途中で誰だコレ？ってなったのもうオリキャラとみてやってください。

もうあれは名前が同じ何かですww

それでも良ければどうぞ

幻想郷の空を駆ける影が一つ。

その影の持ち主は鴉天狗の少女、射命丸文。

彼女は空を飛ぶ時に必ず考える事がある。

かつて、彼女には目指す者が居た。

だが、今、その目指した者は居ない。

今、こうして風を切りながら空を夕日に向かって駆けている中でも容易に思い出す事が出来る。

自分が目指した者と、自分がまだ、共にある事が出来た時間を。

「ああ、あなたは今、何処で何をしているんですか……。いくら私でも今、あなたの下に行くのは無理なんですよ。……歯痒いんですけどね」

妖怪の山、ひいてはこの幻想郷最速の彼女がどうしても行きたく、行けない場所。

それは、この幻想郷の外、京にある鞍馬寺。

時はさかのぼり、平安時代後期。源平の争いが激化する前、まだ

牛若丸が鞍馬寺に預けられていた時。

鞍馬寺の森の中、木と木のぶつかり合う音が聞こえる。

その音に連なつて聞こえる風を切る音。片方はまだ未熟、風を切る時の音が大きい。無駄なものが多いのだ。対してもう片方の音は小さく、それでいて鋭い。

「おお!!」

「ぬ!?!」

掛け声と共に木々の茂みから白い大きな羽をもつた青年が出てくる。

「待て!そこから動くなよ!」

遅れて修行坊主の服装をした小さな少年、牛若丸が出てくる。

対して、白い、大きな羽をもつた青年、鞍馬天狗は樹の枝に軽い足取りで着地する。全く持つて着地音がしないのは、一重に鞍馬天狗の犬天狗たる技量故か。

「甘いぞ、牛若。そんな事では私は愚か平家の者にも勝てんぞ」

鞍馬の後ろ、満月にかぶさつた純白の翼がはためく。

「それ、私を倒したかったらこいつら程度直ぐに倒せるようになる。——行け、鴉共」

鞍馬の掛け声と共に夜空に無数の鴉天狗達が羽ばたく。

「今宵は宴の夜」

「鞍馬の宴は天下」

「いざ参らん」

「鴉の群れ」

「いざ参らん」

鴉達の声は次々と増えていく。そんな中、牛若はただ一人、懸命に寄ってくる順に鴉天狗達に一撃を与えて行く。

しかし、鴉天狗の武と人間の少年の武の差は歴然。

しだいに牛若は勢いをなくし、鴉天狗の木刀を喰らう様になる。

そのまま暫く時間が経過し、丑三つ時を回った時。それまで傍観を決め込んでいた鞍馬の大天狗が動いた。

「皆、それまでだ。わざわざ御苦労だったな」

鞍馬天狗の声を聞くや否や、鴉天狗は自分達の山や持ち場に帰っていく。

そんな中、ただ一人、鞍馬天狗のそばに残っている天狗がいた。

名を射命丸文、現在、幻想郷に住み、天狗の最上級の实力を持つ彼女の約、1000年前の姿だ。

服装はミニスカートでは無く、袴のような物を着、腰には大ぶりの

太刀を佩き、その手には葉団扇を握っている。

そして、目線はただ一人、鞍馬天狗に注がれている。

「牛若、今日の鍛錬はここまで。また明日、相手をしてやる」

「はっ、今日は無理だったが明日こそはお前に一本入れてやるかなー!!」

「期待せずにまっっているさ」

牛若は鞍馬の言葉を聞くと直ぐに寺へと戻っていった。

牛若の代の住職は厳しく、少しにおふざけにも本気の説教が待っている。夜中、寺を抜けだしていたなどと知れたら大変な目に合うのである。

ふと、傍に待機していた鴉天狗、射命丸文が鞍馬天狗に話しかける。

「鞍馬様、この後は」

「はあ、鞍馬と呼ぶなと何度言ったら解るのだ。この後か？この後はそのまま祠に帰って次の夜を待つ。今日はもう昼の巡回は必要あるまい」

「解りました。では今後は孔様、と呼ばせていただきます」

「……その名もなんだが、まあいいか。お前はとうするのだ、射命丸」

鞍馬の大天狗、孔が生まれてまだ数十年の鴉天狗の真正面に向く。

「私ですか？あやや…特にはありませんが」

「そうか、なら今から夜が明けるまではお前の鍛錬につきあつてやる」

そう言った瞬間、孔の背中にある純白の羽がひらかれる。

「いい」

「行きます！」

射命丸は勢いよく突っ込む。

しかし、それはむなしくもいなされ、射命丸の身体は先程自分が居た位置の反対方向に飛ばされる。

「くうッ」

すぐさま体制を立て直し、向かってくる孔に対してなんらかの行動を取るうとする。

「ふむ、直ぐに体制を立て直したのは正解だ。だが、立て直した後にすることを考えていない。…その動作は不正解だな」

孔の持つ葉団扇に力を込める。そして、次の瞬間には暴風が巻き起こっていた。

「くうつ、はぁ！」

射命丸は吹き飛ばされる。

それでも射命丸の身体に傷が無いのは恐らく孔が加減をしたからだろう。

「まだまだです！」

射命丸はこれ以上速さや力や技で挑んだ所で意味は無いと判断し、自信の今の全力を振り絞る事に決めた。

（——もとよりこの身は一回の木の葉天狗、大天狗に挑む機会がある事自体が幸運。ならば、全力と尽くさせていただきます！——）

「行きます！！『疾風風靡』！！！」

文は全身に風を纏い、目標である鞍馬山の大天狗、鞍馬天狗に突貫する。

「成る程、いい判断だ」

対する鞍馬天狗は、ただ空中にたたずむのみ。特にといった動作を起こさない。

しかし、射命丸の全力が当たるかと思った瞬間に——

「え？」

——文の身体を覆っていた風がかき消されたのだ。

何が起こったのか解らずに狼狽する射命丸を孔は容赦なくその純白の翼から飛び出す純白の羽により、追撃する。

「え？うそ？きゃ、きゃあああ！！」

そのまま文は落ちて行つた。

ガンッ！！

「つつう」

頭に突然何かが当たった衝撃を感じて射命丸は回想から現実に戻された。

「な、何が？」

ふと、前を見るとそこには大きな樹の枝があつた。

過去の記憶に浸るあまり、前を見る事を忘れていたのだ。

そんな自分に辟易としながらも枝に腰をおろし、落ち着く。

今思うと、彼に対するこの思いは憧れでも敬意でもなく、恋慕だったのかもしれない。最近はそう思う様になってきている。もし、本当にもし、今彼がこの幻想郷に来たら私はどうするだろうか、と考える。

ふいに思いつくのは自分は間違いなく彼の元に飛んでいき、以前と同じ様に教えをこつたろう。そんな気がするのだ。

「あら、何やら？者？思いの様子ね」

突然、背後から大妖怪の声が聞こえる。

あわてて体制を立て直し、相対すると、相手の妖怪は思った通りの人物だった。

そしてその人物は相変わらずの胡散臭い笑みを扇子で隠している。だが、次に発せられた言葉は信じられない、それでも今の彼女に行動を起こさせるには十分な物だった。

「今、かの有名は鞍馬山の犬天神様が幻想郷に移り住むらしくて、住む場所を探しているそうよ。確か：妖怪の山の中腹辺りに小さな寺を作るとかいつていたわね。大妖怪が小さな寺で――」

賢者の話は途中から聞こえてきていなかった。

なぜなら彼女は飛び出し、空を全速力で駆けていたのだから。

彼女は心のどこかでまだ怪しんでいた。なぜなら彼は既に消えてしまい、その形骸だけが寺の本尊に保護されていると聞いていたからだ。

しかし、その疑問は妖怪の山に近づくにつれて消えて行った。

なぜなら彼の、鞍馬天狗の、孔の妖気を感じるからだ。

そして、遂に幻想郷最速の少女は視界に彼を捉えた。

彼は妖怪の山を一望できる空中に、昔と変わらない、純白の羽をはためかせていた。

彼は射命丸に気付くと大きく眼を見開き、それから受け止める体制に入った。

「ごおおざあまああああー!!」

そして、その腕の中に思いつきりダイブした。

「ああ、ああああー!!」

泣きながら抱きつき、そのまま小一時間は泣いていた。

暫くして落ち着いたのか文が孔に聞く。

「何で、何でまだ生きていますか？」

「ああ、それはさ。俺の能力で死ぬ前の俺が力が全盛期の時の俺の所に来てさ、死ぬ前にここ、幻想郷に行けって言っからさ」

それを聞いて文は納得した。

彼の能力は『時を司る程度の能力』

恐らくその能力で死ぬ前の彼が全盛期の時の彼の元に行き、自分が死ぬ前にこの幻想郷に行き、生きろ。といったのだろつ。元々彼

はそういう考えの持ち主だ。自分の我儘よりは他の意見を尊重する。今回はたまたま他の意見が未来の彼だけだったただけなのだ。

「まあ、何だ。もう心配しないでも傍に居てやるさ」

この日、射命丸は天魔に退職願いを出し、天狗の組織を抜けた。かわりに妖怪の山のふもとは寺ができ、そこに住みついた。

その寺に居るのは大勢の木の葉天狗と一人の鴉天狗、そして鞍馬天狗だ。

毎夜、寺の境内では壮絶な空中戦の模擬戦が行われ、賑やかになっていた。

平安時代にあつた案外重大な事

「孔様」

「何だ？」

「次に私とあつたら一緒になつて下さいね」

「……………」

「なつて下さいね♪」

「……………わかった」

これは、一人の鴉天狗がそれまで過ごした山を離れる時にその山の大将に放った一世一代の告白

(後書き)

ぶっはあああっ

もう、何なんでしょうね。コレ

キャラは何処行っただww

お前何やってんの？馬鹿なの？とかはわかってるのでww

ていうかホントに何がしたかったのでしょうか俺はww

鞍馬天狗とかどっから出てきたしww

ついですがまだ萃香と美鈴、妹紅と紫の分の原案もあるというw

ほんと、メインの執筆は何処行っただのかとww

まあ、学校のアホと地元のアホ、結局アホに触発されて書いた物
ですから出来が酷いですけど

感想とかもらえたら嬉しいです

ではではこの辺で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666t/>

鴉と鞍馬

2011年10月8日03時50分発行